

Dolphin Kick

小林守城

いりくんだ群棲の街のなかで
きみはどれだけ他者を見たか
ものがごとが圧倒的に Signal を発するこわ
きみはどれだけ鋭く言葉を組織したか
早産と多産を強いるこの世界には
橋も虹も架かりはしない
きみが固有の泥床にまどろむ朝
きまって「類」の傷口は裂け
夥しい殺戮が準備される
きみが複数を失う分だけ
小さなきみの幸福が避けられない罨

水中のものより空中のほうが
よく見えているきみのつらい日々
肺呼吸しながら海中に生きる

Dolphin のような二律背反

他者が見ていない群棲の街のなかで
きみはその深い孤独の亀裂を見据え
偶然が結論の消えた道を拓くまで
激しく執拗に問わねばならない

きみのすべての Organ が

躍動する発条になるまで

きみの跳躍はそこに始まる

だがきみは Dolphin のように

海に照らされ海に係留されてある

浮標だきみは

たとえ空の青さまで病んでも

鴟の白い曲線を追いかけても

それは暗い海原を映すためなのだ

生まれたばかりの太陽が

信ずるに足りないとしても

虚というにはまだ早い

Horizon 上の「類」の夢よ

一日の死者の数だけ

生誕をおくり続けるものへ

Dolphin Kick ー